後ろに見えるのが、大阪湾に浮かぶ〝夢洲〟。向かって左上部が万博会場建設予定地。

知事対談

石毛博行×仁坂吉伸

公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会事務総長　和歌山県知事

いのち輝く未来社会に向けて

会場の空を飛ぶ車。海・空・陸からのアプローチ。
大阪・関西万博のテーマは、〝いのち輝く未来社会のデザイン〟。
それは、いのちを救い、いのちに力を与え、いのちをつなぐ未来社会の実験場である。
コロナ禍を経験し、急速に変化する社会の中で、
いのち輝く未来社会に向けて、必要なものとは。

仁坂知事（以下仁坂）●石毛さんは私と同じ年に通商産業省（現経済産業省）に入省し、その後は日本貿易振興機構（ジェトロ）の理事長を経て、現在は２０２５年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）の実務を取り仕切る２０２５年日本国際博覧会協会の事務総長を務められています。まずは通産省時代の話や、事務総長に就任された経緯などからお伺いできますか。

石毛博行（以下石毛）●通商産業省に知事と同期入省したのが１９７４年。前年に石油ショックがあり、戦後初めて経済成長がマイナスになるという、今とは相当違った時代でした。特に印象深いのは、１９８６年～94年に行われたウルグアイラウンドに関わったことです。その間の３年ほどスイスのジュネーブに勤務していたのですが、ちょうどその当時、知事もミラノで勤務されていたので、何度か行き来したことがありました。そして経済産業省の退官後は、ジェトロに７年半いまして、２０１８年11月だったと思いますが、中南米のグアテマラの事務所を視察している最中に、大阪・関西万博の誘致決定という連絡を受けました。ジェトロからも応援団が出ていたものですから、みんなで喜んでいたのですが、その時はまさか自分が事務総長になるなんて夢にも思っていませんでした。それで、縁あってといいますか事務総長をやってくれないかというお話を受けまして、どうしようかなと考えましたが、大きなイベントでもあるし、やりたいという気持ちもあって、迷った時は前に進むということで、お受けいたしました。まあ、やってみると、大変な毎日ではありますが、それなりに楽しくさせていただいております。

仁坂●当時は、アルプス山脈を越えて、よく行き来しましたね（笑）。また、ジェトロにおられる時は、全国初の試みとなる県庁内へのジェトロオフィスの設置でもお世話になり、おかげで随分県内企業の海外展開もでき、本当に感謝しております。さらに現在は、コロナ禍による経済活動の低迷や万博に向かうという気持ちになりにくい雰囲気もある中で、こういった逆境に耐えながら事務総長として大阪・関西万博の開催に向けて、一生懸命尽力されておられます。ぜひこれはみんなで応援していきたいと思っています。

大阪・関西万博の特徴と開催意義とは

仁坂●大阪・関西万博は、大阪のみならず関西や日本にとっても、大きな経済効果が期待され、多くの人々が高い関心を寄せていると思います。まずは、その大阪・関西万博の特徴や開催の意義をお聞かせください。

石毛●〝いのち輝く未来社会のデザイン〟というテーマですが、当初は〝健康長寿〟という考え方でした。それは先進国の国々にとっては、的を得たテーマではあるのですが、まだアフリカのザンビアのような若々しい国にとってはピンと来ないものでした。逆に先進国の国々では当たり前の〝生きる〟とか〝生き抜く〟とか、「命」といったことの方がはるかに重要なんですね。そう考えると、もっと広い範囲で、より多くの国が参加できるテーマにしようということで〝いのち輝く未来社会のデザイン〟となりました。とはいえ、〝命〟に焦点を当てていることには違いなく、コロナ禍となり、さらにこのテーマの重要性が増してきていると感じています。また、この世界的な新型コロナウイルスの感染拡大は、地球上での人間の活動領域が広がったことで起こったかもしれないわけです。そう考えると人間の命だけを考えるのではなく、「地球全体の命をもっと正面から考えないと

知事対談

石毛博行×仁坂吉伸

公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会事務総長　石毛博行

和歌山県知事　仁坂吉伸

いけない」というふうにだんだん発展してきています。そしてもう一つ重要なのは〝未来社会の実験場〟であるということです。具体的には空飛ぶクルマだとか、長蛇の列で待たされない、CO2を出さないといった会場運営だとか、〝本当に実現するかな？〟と思われることも含めて目標にして、未来の社会をどう示し、実現するのかということを、今、関係者と一緒に進めています。また、今まで、これほど海に囲まれた場所でやる万博というのはないので、そういう意味では、海に囲まれた会場で、海、空、陸の三つの方向からアプローチをするような万博になるように企画をしています。

世界とつながる「海」と「空」が印象強く感じられる、大阪・関西万博の会場の完成予想図。主動線である円環状の回廊は、1周およそ2キロメートル。

万博を成功させるための重要な3つのポイント

仁坂●開催が待ち遠しいですが、実際に大阪・関西万博を成功させるためのポイントはいろいろあると思いますが、石毛さんはどのようにお考えですか。

石毛●ロゴマークや基本計画の作成、政府の国際博覧会推進本部設置や国際博覧会事務局（BIE）からの承認など、2020年には万博の準備を進めるための枠組みはほぼできあがりました。そして、2021年に直面していた課題は、まさに万博を成功させるための重要なポイントでした。一つは外国の参加。万国博覧会というぐらいですから、外国が参加して初めて万博となりますが、ドバイ万博が新型コロナウイルスの影響で1年延期されるなど、このコロナ禍の時代に、外国からの参加を呼びかけるのは非常に大変です。次に企業の参加。会場となる夢洲には、イベント会場や多くのパビリオンが建てられ、各々を繋ぐ道路をはじめ、下水道や電気・ガスといったインフラ設備も必要となり、そういった建設や整備費に最大1850億円かかると試算しています。それらは国と地方自治体と企業の寄付でそれぞれ3分の1を負担することになっており、企業からの寄付を集めることが非常に重要となっています。加えて、日本の万博では、国際博覧会事務局（BIE）などからも特に企業パビリオンが高い評価を受けており、企業への期待はものすごく大きいんですね。また、70年万博では岡本太郎さんが担当していた、その万博のテーマを会場で表現するテーマ事業では、当時の岡本さんに相当する8人のプロデューサーの方々と一緒になって、協賛企業を募る働きかけを行っています。そして最後に機運の醸成です。2020年に開催テーマである〝命〟を彷彿させる細胞をモチーフにしたロゴマークを決定し、グッズ販売にも取り組んでいます。今後はキャラクターデザインなども公表し、大いに2025年の開催に向けて機運を盛り上げていきたいと思っています。

2021年より販売されている、大阪・関西万博公式ライセンスグッズ。

仁坂●2025年の大阪・関西万博の開催は、何といっても大阪だけでなく関西全体の発展のための大きな手がかりになると思っています。そんな思いから、和歌山県としても誘致活動では大いに協力をさせてもらい、万博の開催が決まった時には本当に喜びました。今度は、そのせっかくの大阪での万博を、どうやって関西、ひいては和歌山の発展のために、うまく生かしていくかということを考えていく必要があります。特に今回の万博の会場となる夢洲は、海に囲まれた、今までの万博の中では比較的小さい会場です。そこに世界中から多くの人達が訪れるだけではつまらないので、この人達が周りの関西や日本各地を訪れるような工夫が必要だと思っています。大阪・関西万博なのですから関西広域連合でパビリオンを作ります。そこでは入口の全体ブースで関西全体の魅力を紹介した上で、各県ブースを作ります。和歌山県ブースでは観光資源をバーチャルで味わってもらいます。その後、実際に和歌山県を訪れてもらってリアルな観光を体験してもらうといった構想を考えています。このように各県もそれぞれ工夫して、万博効果が会場の夢洲だけではなく、関西や日本全体に広がっていくような万博になってくれればいいなと考えています。

万博のテーマでもある命とは？未来社会とは？

仁坂●〝いのち輝く未来社会のデザイン〟というテーマからもわかるように、今回の万博は、命や未来社会の在りようを示す万博といえると思いますが、石毛さんが考えられる未来社会とは、どのようなものですか。

石毛●非常に大きな問題ですが、万博のテーマである〝いのち輝く〟のいのち。とりわけコロナ禍を経験した我々は、人間って何だろう？生き物って何だろう？という問題意識を持つようになりました。未来社会、それは人間だけではなく、この地球のいのちを絶やさないように、気候変動などの問題についても真正面から向き合う必要がある社会になっていくのではないでしょうか。一方で、今までは皆が豊かな社会を目指して、科学技術を進歩させ、競争や効率化を進めながら邁進してきたわけです。さらにはコロナ禍となり、バーチャルやオンラインなどが急速に広がり、より一層の利便性や生産性の向上なども期待される反面、より社会や人との繋がりの希薄化も進むのではと危惧されます。ただ、そんな中でも、人はどこかで人との繋がりを求め、心の安寧をより求めたいと思うような社会になっていくのではないかと思っています。もちろん今回の万博では、科学技術の進歩だとか、そういう未来社会の実験場といえるようなことを示す場でもあるわけですが、もっと私たちの心の安らぎが得られる、そういうことが重要だよということを考えるきっかけになるような、そういう万博にしたいと考えています。オリンピック・パラリンピックも終わり、次はいよいよ大阪・関西万博だという機運を盛り上げ、多くの方から参加したいと思ってもらえる、そして、この万博をゲートウェイとして、関西や日本全体の発展に貢献できる万博になるよう、これからも準備を進めていきたいと思います。

石毛博行

1950年千葉県生まれ。1974年通商産業省（現経済産業省）入省。製造産業局長、中小企業庁長官、通商政策局長、経済産業審議官、独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）理事長を経て、2021年5月から公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会事務総長。

大阪・関西万博のプロデューサー陣

○会場デザインプロデューサー：藤本 壮介 氏（建築家）
○会場運営プロデューサー：石川 勝 氏（プランナー、プロデューサー）
○テーマ事業プロデューサー
・【いのちを知る】福岡 伸一 氏（生物学者、青山学院大学教授）
・【いのちを育む】河森 正治 氏（アニメーション監督、メカニックデザイナー）
・【いのちを守る】河瀬 直美 氏（映画監督）
・【いのちをつむぐ】小山 薫堂 氏（放送作家・脚本家）
・【いのちを拡げる】石黒 浩 氏（大阪大学教授、ATR石黒浩特別研究所客員所長）
・【いのちを高める】中島 さち子 氏（音楽家、数学研究者、STEAM 教育家）
・【いのちを磨く】落合 陽一 氏（メディアアーティスト）
・【いのちを響き合わせる】宮田 裕章 氏（慶応義塾大学教授）

仁坂●石毛さんがおっしゃったように、コロナ禍を経験し、ますます社会が変化していく中で、今までの社会がそのまま存在するはずはありませんよね。そうするとその変化を見据えて、そこから生じるチャンスを和歌山に取り込んでいくことができれば、和歌山県の未来は絶対に明るいものになると思っています。その最大のチャンスといえるのが、大阪・関西万博だと思うので、これを最大限活用して、和歌山がどんどん発展するように、みんなで頑張っていきたいと思っています。本日はお忙しい中、ありがとうございました。